

## テスト対処方略が女子短期大学生の学業成績に及ぼす影響

——学生の友人数による調整効果——

清水 陽香<sup>1</sup>・福井 謙一郎<sup>2</sup>・中島 健一郎<sup>3</sup>

Effect of test coping strategies on academic achievement of women's junior college students:  
An examination of moderate effect of the number of friends

Haruka SHIMIZU · Kenichirou FUKUI · Kenicirou NAKASHIMA

### 問 題

学業成績は、学生の心理的適応に影響する重要な要因の1つである (e.g., Pluut, Curşeu, & Ilies, 2015; 山内・坂野, 2010)。女子短期大学での調査を行った松元・宮里 (2015) は、対人関係などの他のストレスの影響を統制した上で、学業に関するストレスが学生の抑うつの高さに関連することを明らかにした。同様の結果は、中学生や高校生を対象とした調査においても示されている (岡安・嶋田・丹羽・森・矢富, 1992; 度會, 2018)。さらに、平成29年度の大学等における学生支援の取組状況に関する調査 (日本学生支援機構, 2018) では、学生相談の内容として大学全体で「増えている」との回答が最も多かったのが、授業の内容や進度に関する相談などを含む「修学上の問題」であった。以上をふまえれば、学生の学業に対する支援を行うことは、教育を行う側にとって重要かつ喫緊の課題であると言える。

学業成績に影響する要因の1つに、試験に対してどのように準備を行うかという、テスト対処方略がある。どのような対処方略をとるかは、個人によって異なる。試験に向けて計画を立てて勉強をするといった積極的な対処をとる個人もいれば、試験について考える事を避けるような回避的な対処をとる個人も存在する。一般に、学習時間と学

業成績に正の関連があるという指摘 (松沼, 2009) を鑑みれば、積極的な対処が高い成績につながり、回避的な対処は低い成績につながると考えられる。

また、友人関係も学習に対する動機づけや学習行動、学業成績に影響することが明らかになっている (e.g., 石田, 2005; 外山, 2004)。友人関係は、学生が持つネットワークであり、対人的な資源と捉えることができる。学生はそれぞれが持つネットワークを介して、他の学生が持つ資源を利用することができるためである (芳賀・高野・羽生・坂本, 2017)。学業場面であれば、資源の利用可能性が高いほど、互いに授業内容について教え合ったり、試験に関する情報を共有したりといったことが可能になると考えられる。実際、狩野・田崎 (1990) は、良好な友人関係が効率的な学習を促すと述べている。また Wentzel & Caldwell (1997) によれば、友人の多さは道具的サポートの受けやすさにつながり、学業成績が向上する。これらのことから、学生の対人ネットワークは学業成績を高めるための資源となりうる。

以上をふまえると、学生の資源の利用可能性によって、テスト対処方略が学業成績に及ぼす影響が変わる可能性が考えられる。例えば、個人が回避的な対処を行っていても、資源が豊富、すなわち広い対人ネットワークを持っている場合には、

<sup>1</sup> 日本学術振興会

<sup>2</sup> 長崎女子短期大学幼児教育学科

<sup>3</sup> 広島大学教育学研究科

試験に関する情報に触れる機会や、積極的対処をとっている他の個人に触れる機会が増え、回避的対処が継続しにくくなる可能性がある。

そこで本研究では、対人ネットワークの指標として友人数に着目し、友人数とテスト対処方略が学業成績に及ぼす影響を検討することを目的に、大学生を対象に質問紙調査を実施する。

本研究の予測は以下の通りである。まず、学習時間と学業成績に正の相関があることから（松沼, 2009；塩谷, 1995）、テストに対する積極的方略は学業成績と正の関連を持つと考えられる。一方で、回避的方略は学業成績と負の関連を持つことが予測される。友人数が学業に及ぼす影響に関しては、Wentzel & Caldwell (1997) の指摘をふまれば、友人数が多いほどサポートが受けやすくなり、成績が高くなると考えられる。その効果は、回避的方略において顕著にあらわれる可能性が考えられる。具体的には、回避的方略は成績と負の関連を持つが、友人数が多い場合には、関連の度合いが弱まる可能性がある。すなわち、学業成績に対して回避的方略と友人数の交互作用が示されることが予測される。

## 方 法

**参加者** 私立女子短期大学の1年生108名が調査に参加した。平均年齢は18.98歳 ( $SD=1.89$ ) であった。

**手続き** 調査は1月の後期試験の約1週間前の講義終了後に実施した。調査への回答は任意であり途中で回答をやめることができること、回答しないことによる成績や学業上の不利益はないこと、回答は統計的に処理されるため個人が特定されることはないことを説明した上で、調査を開始した。一斉教示・個別回答による集団調査であった。なお、本研究の手続きは広島大学における倫理審査を受け、承認を得たものである。

**測定指標** まず、「これから実施される各科目の期末試験に向けて、今現在どのように考えたり行動したりしていますか。以下に示す考えや行動を、あなた自身が実際にどのくらいしているのかについて、最もよくあてはまる数字に○をつけて

ください」と教示した上で、テスト対処方略尺度（外山, 2005）を用いてテスト対処方略を測定した。20項目について、「1：あてはまらない」から「5：あてはまる」の5件法で回答を求めた。次に、「大学入学後に知り合った人で、大学内でよく話をする人」のイニシャルを記入するよう求め、これを友人数の指標とした（Shimizu, Nakashima, & Morinaga, 2019）。なお、イニシャルを記入する人数の上限は設定しなかった。さらに、後期の期末試験における各科目の得点（100点満点）の平均値を学業成績の指標として用いた。また、学力の差を統制するため、前期の期末試験における各科目の得点の平均値のデータも用いた。最後に年齢の記入を求めた。

## 結 果

### テスト対処方略尺度の因子構造および信頼性の検討

テスト対処方略尺度について、外山（2005）の因子構造に基づき確認的因子分析を行ったところ、適合度が基準を満たさなかった（CFI=.49, RMSEA=.07, SRMR=.23）。そのため、MAP（Minimum average partial correlation；最小平均偏相関）を基準とし、因子数を3と指定した上で最尤法（プロマックス回転）による探索的因子分析を行った。因子分析の結果および $\alpha$ 係数をTable 1に示す。

第1因子は「テスト対策を立てる」「勉強をして学力をつける」など、テストに対して積極的な準備を行う内容の項目が含まれたため、積極的対処因子とした。第2因子は「誰かに話を聞いてもらい、気持ちを晴らす」「誰かに話を聞いてもらい、どうしたらよいか考える」など、他者に援助を求める内容の項目が含まれたため、援助要請因子とした。第3因子は「どうにでもなれと思う」「なるようになれと思う」など、テストに対して向き合うことを避ける内容の項目が含まれたため、回避的対処因子とした。以上の因子構造に基づき、積極的対処得点、援助要請得点、回避的対処得点を作成した。 $\alpha$ 係数は順に $\alpha=.82, .86, .76$ であった。

**テスト対処方略と友人数が学業成績に及ぼす影響の検討**

分析に使用した各変数の記述統計量および単相関分析の結果を Table 2 に示す。

友人数とテスト対処方略が学業成績に及ぼす影響を検討するため、3つの対処方略得点ごとに、後期の学業成績を目的変数とする階層的重回帰分析を実施した。Step 0 に統制変数として前期の学

業成績、Step 1 に対処方略得点および友人数、Step 2 にそれらの交互作用項を投入した。その結果、回避的対処得点を用いた分析について、Step 2 の  $R^2$  の増分が有意であり ( $\Delta R^2 = .01, p = .03$ )、回避的対処得点と友人数の交互作用項が、後期の学業成績と有意な正の関連を示した ( $\beta = .11, p = .03$ )。単純傾斜の検定の結果を Figure 1 に示す。

**Table 1**  
テスト対処方略尺度の因子分析結果 (最尤法, プロマックス回転)

	F 1	F 2	F 3	共通性
<b>F 1 積極的対処</b>				
6 テスト対策を立てる	.75	-.01	-.11	.62
8 勉強をして学力をつける	.72	.07	-.21	.66
16 これまでの反省を踏まえて、どのようにしてゆくべきかを考える	.67	-.01	.00	.45
2 勉強方法を工夫する	.67	-.08	-.12	.49
1 良い結果になると考える	.58	.03	.17	.32
18 テスト勉強は自分のためになると考える	.57	-.06	.08	.29
11 悪い結果にならないと楽観的に考える	.50	.16	.37	.37
<b>F 2 援助要請</b>				
7 誰かに話を聞いてもらい、気持ちを晴らす	-.11	.92	-.09	.78
20 誰かに話を聞いてもらい、どうしたらよいか考える	.08	.74	-.04	.58
12 誰かに話を聞いてもらい、励ましてもらう	.13	.74	.04	.63
19 頭に浮かべないようにする	-.22	.47	.25	.36
<b>F 3 回避的対処</b>				
3 どうにでもなれと思う	.00	-.18	.92	.80
5 なるようになれと思う	.05	-.06	.86	.70
10 あまり考えないようにする	.04	.28	.46	.35
4 気晴らしに友達と遊ぶ	-.08	.15	.42	.25
	因子寄与	3.27	2.68	2.68
	因子間相関			
	F 1	1.00		
	F 2	.24	1.00	
	F 3	-.28	.24	1.00
	$\alpha$ 係数	.82	.81	.76

**Table 2**  
記述統計量および単相関分析結果

	M	SD	1	2	3	4	5
1. 積極的対処	3.84	0.74	1.00				
2. 援助要請	3.08	0.96	.21*	1.00			
3. 回避的対処	2.81	0.99	-.15	.29**	1.00		
4. 友人数	8.50	5.18	-.08	.03	.13	1.00	
5. 成績 (前期)	75.41	6.61	.20*	.16	.04	.09	1.00
6. 成績 (後期)	79.79	5.01	.14	.08	-.05	.02	.85**

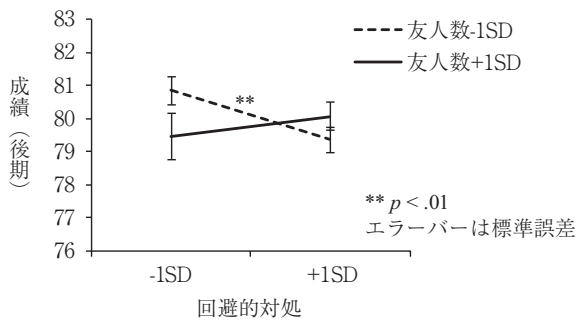


Figure 1 回避的対処と友人数が学業成績に及ぼす影響

友人数低群 (-1SD) において、回避的対処得点が学業成績と負の関連を示した ( $\beta = -.15$ ,  $p = .004$ )。友人が少ない個人において、回避的対処を行うほど学業成績が低かった。友人数高群 (+1SD) における回避的対処得点と学業成績の関連は有意ではなかった。また、回避的対処得点低群 (-1SD)、回避的対処得点高群 (+1SD) のいずれにおいても、友人数と学業成績の有意な関連は認められなかった。

積極的対処方略得点および援助要請方略得点を用いた分析では、対処方略あるいは友人数と学業成績の間に有意な関連は認められなかった。

## 考 察

本研究の目的は、大学生の友人数とテスト対処方略が学業成績に及ぼす影響を検討することであった。

階層的重回帰分析の結果、友人数によって回避的対処方略と学業成績の関連が異なることが明らかになった。具体的には、友人が少ない学生において、回避的対処が学業成績と負の関連を示し、友人が多い学生ではこの関連は有意ではなかった。これは予測を支持する結果であった。

友人の多い、すなわち対人ネットワークが広い学生は、友人との間で試験に関するコミュニケーションが生じる機会が多いと考えられる。その場合、個人が試験について考えないようにするなどの回避的対処を取っていても、受動的に試験に関する情報に触れやすいことが推測される。そのため、回避的対処が学業成績に影響しにくくなる可能性がある。一方で、友人の少ない学生は、個人

が回避的対処を取った場合にはそのまま試験に関する情報に触れる機会が減り、成績の低下につながるのではないかと考えられる。

以上をふまえると、教育を行う側が授業や個別指導を通して、学生に学業面への介入を行う場合には、学生がどのような対人ネットワークを資源として有しているかにも着目する必要性が示唆される。具体的には、特に友人の少ない学生のテスト対処方略に注意を払い、当該の学生が回避的対処方略を取っている場合には、方略を切り替えられるような働きかけを教育者から行うことが、学業成績を高めるために重要である可能性が示唆される。

ただし、本研究では試験に関するコミュニケーションは測定していないため、友人数の多い学生において実際にそうしたコミュニケーションが生じる機会が多いのか、またそれが学生のテスト対処方略や学業成績にどのように影響するのかについては、今後の検証が必要である。また、本研究の参加者は女子学生のみであるため、知見の一般化には限界がある。男子学生も含めた異なるサンプルを対象とした追試を実施し、知見の再現性を確認する必要がある。

## 引用文献

- 芳賀道匡・高野慶輔・羽生和紀・坂本真士 (2017). 大学生生活における主観的ソーシャル・キャピタル尺度の開発. 教育心理学研究, 65, 77-90.
- 石田靖彦 (2005). 児童・生徒の友人関係が学業達成に及ぼす影響. 愛知教育大学研究報告, 54, 109-115.
- 狩野素郎・田崎敏昭 (1990). 学級集団理解の社会心理学. ナカニシヤ出版.
- 松元理恵子・宮里新之介 (2015). 女子短期大学生の学生生活ストレスと精神健康との関連について. 鹿児島女子短期大学紀要, 50, 111-119.
- 松沼光泰 (2009). 英語の定期テスト好成绩者が実力テストで成績が振るわないのはなぜか? 心理学研究, 80, 9-16.
- 日本学生支援機構 (2018). 「大学等における学生支援の取組状況に関する調査 (平成29年度)」結果報告 調査概要および調査結果 (単純集計). 日本学生支援機構. Retrieved from [https://www.jasso.go.jp/sp/about/statistics/torikumi\\_chosa/\\_icsFiles/afiedfile/2018/11/29/1\\_kekka.pdf](https://www.jasso.go.jp/sp/about/statistics/torikumi_chosa/_icsFiles/afiedfile/2018/11/29/1_kekka.pdf) (2019年10月16日)
- 岡安孝弘・嶋田洋徳・丹羽洋子・森 俊夫・矢富直美 (1992). 中学生の学校ストレスの評価とストレ

- ス反応との関係 心理学研究, 63, 310-318.
- Pluut, H., Curşeu, P. L., & Ilies, R. (2015). Social and study related stressors and resources among university entrants: Effects on well-being and academic performance. *Learning and Individual Differences, 37*, 262-268.
- Shimizu, H., Nakashima, K., & Morinaga, Y. (2019). The role of individual factors in friendship formation: Considering shyness, self-esteem, social skills, and defensive pessimism. *Japanese Psychological Research, 61*, 47-56.
- 塩谷祥子 (1995). 高校生のテスト不安及び学習行動と認知的評価との関連 教育心理学研究, 43, 125-133.
- 外山美樹 (2004). 中学生の学業成績と学業コンピテンスの関係に及ぼす友人の影響 心理学研究, 75, 246-253.
- 外山美樹 (2005). 認知的方略の違いがテスト対処方略と学業成績の関係に及ぼす影響—防衛的悲観主義と方略的楽観主義— 教育心理学研究, 53, 220-229.
- 度會文映 (2018). 本来感・自尊感情・精神的健康が高校生の心理的ストレス過程におよぼす影響 山形大学教職・教育実践研究, 13, 57-68.
- Wentzel, K. R. & Caldwell, K. (1997). Friendships, peer acceptance, and group membership: Relations to academic achievement. *Child Development, 68*, 1198-1209.
- 山内 剛・坂野雄二 (2010). 大学生における身体感覚の増幅およびストレスの経験と健康不安との関連 心身医学, 50, 313-319.